

アイルランドの光と影

現代終末期医療の源泉 — メアリー・エイケンヘッド

宮 坂 万喜弘*

キーワード：英国のアイルランド統治、キルケニー法・カトリック刑罰法・大飢饉・立ち退き令、メアリー・エイケンヘッド、アワーレディース・ホスピス、聖フランシス・ホスピス

序 文

日本医療の近代化を促進させた明治期の日赤創立者佐野常民の末裔である岡村昭彦が、1985年に亡くなってから既に23年がたとうとしている。医学校に進学した岡村昭彦がなぜかベトナム戦争の現状に疑問を抱き、アメリカのPANA通信社特派員としてタイ・ラオス・カンボジア、南ベトナムに駐在して、国際報道の現場での活躍により著名人となった。そしてその後、21世紀の高齢化社会に向けての看護を考えるために、『ホスピスへの遠い道』——現代ホスピスのバックグラウンドを知るために——として、世界の実情を執拗に日本の医学会にむけて発信するようになった。医学校に行きながら、その後報道畑で活躍する道を辿ることになった大転換を不思議に思いつつ、彼の『ホスピスへの遠い道』を紐解いた。

アイルランドでコークの街を訪れ、ホスピスの発想の淵源に存在している修道院総長メアリー・エイケンヘッド（Mary Aikenhead 1787-1856）の故郷に深い思いを抱いた岡村は、自分の息子の基礎教育をアイルランドで授けることを実行する親であった。そしてまたシシリー・ソンドース女史に代表されるロンドン郊外にあるセント・クリストファーホスピスの活動の現実から、彼は世界

各地、イギリス・フランス・アメリカ・ベルギー・オーストラリアなどを訪ね、各地で抱えているホスピスの課題と歴史を取材発掘した、貴重な記録『ホスピスへの遠い道』を世に出した。アイルランドのメアリー・エイケンヘッドは、弱者の立場から物事を考え、無私なる慈悲の心の実行が現代社会の新たな活動の指標となった。日本でも有名なインドのマザー・テレサの活動もこの実践のアジア版として位置づけられよう。メアリー・エイケンヘッドの活動が現代ホスピスの理念に繋がった事を、筆者はこの稿で論述したい。

庶民の相互扶助から、弱者の心に希望の灯を燈す活動をした、アイルランドの歴史について、岡村昭彦はその著書『ホスピスへの遠い道』の中で、歴史の重要性について次のように述べている。

「人間の思想は、その人が死んでも幾百年も生き続ける物だ。だから、その思想を生み出した時代とその背景について、少なくとも300年にわたってさかのぼる必要がある」……と⁽¹⁾。

これは弱く貧困な立場におかれた大衆に、マザー・エイケンヘッドが、神の愛アガペー（自己犠牲の愛）を示し、後世のホスピスの生みの親として語られていることに言及している文章の一部である。マザー・エイケンヘッドとはどのような時代に、何をした人か。彼女とアイルランドについて理解することが、現代終末期医療を知る基礎だという理由は、何なのかとの問いから始める。

2008年11月28日受付

* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授 西洋思想、倫理、比較思想

まずメアリー・エイケンヘッド理解のため、上記の岡村昭彦の示唆に従って、彼女が活躍した時代の「歴史」を調べてみると、この国の民衆の辿った不幸の本質とは、歴史的事実にあることがわかる。この環境下にアイルランドの人々が生き残る事、しかもなお忍耐力のみによって、全滅を拒もうと立ち向かった過去を見、今も最良の特質をあまり失わないで世界各地で旺盛な活力を示し、祖国や世界に政治的影響や文化的影響を与えていることを知れば、岡村が「アイルランドの歴史を見てゆくと、月並みな歴史の本道に沿って歩くより、その面倒な側道を歩く方が報いられるもののずっと多い事が良くある」⁽²⁾と述べている。つまり、この国が蒙った時代の曲折した困難さをうかがい知るのである。彼は何度となくアイルランドの農村地帯を訪れて、野原や畑の窪地の露出した中から過去の時代の遺物を見つけては、それを大切に収集している。それら遺物はこの地で苦難のうちに暮らしていた農民の生活の痕跡であり、苦難の時代の事実を証明するもので、忘れてはならない記念碑なのだというのである。

実際に訪れて心引かれるのは、この国の自然と人との関係、人と自然がかもし出す印象だ。その自然の中に住む人々は、ヨーロッパ大陸のドイツやフランスなどのよそよそしさとは異なり、人の心と自然の関係の穏やかさから、自然を人間と関係付けて見る自然観——森の妖精の存在など——があることに納得する。つまり自然が人と一体となり、人格的観点を持った妖精との関係で語る雰囲気、今でもそここに感じられるようだ。

ところで現在の世界的な国家アイルランドの祝日 St. Patrick Day と名前が付けられたカトリックの祭りがある。この St. パトリックという聖人——（アイルランド出身、—— 389?-461? ——）は若いとき数奇の生涯を体験した人物だったという。彼は、カトリック司祭となって同胞の異教徒であったアイルランドの人々の中に、ローマ・カトリック教会の教えを説き、さほど問題とすることなしにこの教えを大衆にとけ込ませたという⁽³⁾。

しかし、英国はカトリック教信仰を止めないア

イルランドの人々を敵視した。人々はその信仰のゆえに、“個人としての人間の尊厳と価値、個人的存在の大切さ”を微塵にも感じる事が出来ないほどの地位に落とされた。しかし今もお住民の 90 パーセントがカトリック教徒であり続けているという。

こうした歴史を持ったこの国の中から生じた運動のキッカケが、現代の社会的弱者（含高齢者）の人間の尊厳と価値、個人的存在の大切さを重視し、世界的な思想潮流として終末医療の土台に位置づけられ、その思想と活動が重要視されるようになったのは、歴史の示す大逆転の皮肉とも言える。

この稿は以下の順序で、アイルランドの地で現代終末医療の基礎が芽生えた経緯を述べる。

1. 現代の終末医療の基礎はなぜアイルランドだったのか
2. ホスピスの理念はどのようにしてマザー・エイケンヘッドにより基礎付けられたか
3. アイルランドのホスピス
4. まとめ

1 章 現代の終末医療の基礎はなぜアイルランドだったか

この項の理解には、アイルランドという「国の置かれた歴史」の確認から始める必要がある。まず岡村明彦は明治以来の英国歴史とアイルランドの関係について、「わが国の教育は上から下を向きながら、たとえばクロムウェルの征服はその一生を汚がす一大黒点なり」⁽⁴⁾と示し、クロムウェルの残虐行為を上から非難するだけのものであったと指摘する。そして彼は、メアリー・エイケンヘッドを理解するのに最も必要であることは、被害をこうむった弱者の側から見た歴史観の存在に目を向けることの大切さを語るのである。このことがなぜそれほど必要なのか、この点を明確にするために、アイルランドの庶民の置かれた歴史的経緯を簡潔に纏めて、実情を見ていくことにしよう。

1) 英国の支配と統治

ヨーロッパの古代からの最も古い民族ケルト人の住む国が、外国の支配に苦しみ続けた意外の内容に驚かない人は居ないだろう。一体なぜこの国はこのような過酷の歴史を歩んだのか、という疑問である。

さてアイルランドは古代以来ノルマン人の侵入を受けながらも、他の民族同様、自民族の生存を保つ努力をした。この国の人々は不屈な民族といわれる。しかし12世紀の初めイングランド王・ヘンリーⅡ世(1133-1189)が、アイルランド国内の王達の権力争いに乗じて、自ら貴族(アングロ・ノルマン系貴族)を率いてアイルランドに侵入(1171年)した。アイルランドのコノート侯ローリー・オコナーと戦ったヘンリーⅡ世は覇権を握った。彼はコノート侯ローリー・オコナーをアイルランド統括の王と認めることと引き換えに、英国王への貢物を他の諸侯から徴収する義務を追わせ、様々な政治的軍事的要求も突きつけた。アイルランド人民は抵抗し、以後アイルランドの800年近いケルト人の苦悩の歴史が始まるのである。

エドワードⅢ世(1312-1377)統治下の「キルケニー法」(1366年)

英国の征服者達は、徐々にこの国の支配権を強固なものとするべく、それまでにも土着の住民と衝突を繰り返してきたが、植民地支配を徹底強化するために、英国人と土着アイルランド人との同化を禁止する政策を徹底させて行った。その条項が「キルケニー法」であった。これにより現地人との交流は遮断された。現地女性との結婚禁止、現地文化に同化した名前・言語・服装などの使用禁止を命じた。違反者は国教徒(または新教徒)のほうで、罰を受け、男は公民権を失い、女は財産相続権を失うのであった。この法律の成立以前からイギリス人はアイルランド人を嫌い、彼らと接触することを避け、^{ペイル}柵内と呼ばれる居留地(治外法権領域)を作って、イギリスの法律と習慣の中で統治者として過ごしていた。カトリック教徒の新聞・書籍の出版と販売の禁止(ケルト人達の結束・団結の宣伝が不可能)。都市では商工業の

ためにカトリック教徒に従業員とすることを禁止(農村の出身者が都市で職を見つけられない)。またわずかにいた商工業者は、麻の商い以外は二人以上の従業員を雇えないことであった(カトリック教徒は事実上商工業に進出できなくなった)。違反者は土地・家屋・地位没収などの刑罰に問われることになり、ここに支配者英国人と被植民地人(農奴)としての徹底した関係が社会制度上確立した。

ヘンリーⅧ世(1491-1547)統治下「国王至上法」(1534年)により、従来のアイルランドの領主達に、一旦その支配圏を英国王ヘンリーⅧ世に差し出させた後、英国王ヘンリーⅧ世が再度これを従来のアイルランドの領主に臣下の形で認め、現地人の指導者を制度上英国の支配下に組み込んでいった。したがって土着民の側から見れば、形はそれまでの領主であるが、最高支配者が英国王のため、宗教的にローマ法王に代わる英国国教会がアイルランドを統治する事となった。つまりイングランド王の意思・命令の実行統治が行われていく。しかし大衆は、カトリック教徒であることをやめず、改宗をしなかった。以後英国統治下のアイルランドでは、支配者である英国国教会の英国王の統治・命令の実行は、カトリック教徒の庶民の生存の状態に配慮することなく冷酷に行われていく。

そしてエリザベスⅠ世(1558-1603)統治下の40年間の間に、恐怖の社会が実現して行く。デズモンドの戦は、マンスターの征服で終止符をうった後、南部の肥沃の土地はイングランド女王に没収され、そこに住む原住民はやせた西部地域へと追い払われ、計画的に餓死へと追いやられていった。短期間に人口の多かった豊かな国が、突然人も獣もない状態で放棄されたのである。その土地を本国イングランド各地の家庭の次男、三男には、デズモンドの植民地を営むため、土地を大規模で交付するが、原住民は一人も使用してはならず、居住させてもいけないとの条件付きの若者募集の通達が出された。ヘンリーⅡ世(1133-1189)の出現からエリザベスⅠ世(1558-1603)の統治まで、この国は7年間以上続く平和な時間を持っ

ていない。この混沌たる状況を乗り切り、植民地化を名実共に実現するため、当時ヨーロッパで最も優秀な戦闘体験の豊かであった將軍達が、アイルランドに急派され、国家予算を上回った莫大な資金が投入された。そして、現地住民の蜂起の粉碎とカトリック信仰の根絶、アイルランド人気質を粉碎して民族の痕跡をなくさせる手段を取ったのである。しかし戦場での虐殺が意味を持たないとわかった司令官達は、原住民の逃げ込んでいた町や城郭を焼き払い、領土のいたるところを荒廃させて行った。統治する地域は死体と灰燼以外何も見当たらない有様であった。

この状況にアイルランド人の先頭に立ち、エリザベス I 世軍に反乱を企てて立ち上がったティロン伯爵が居た。彼は女王の死亡の後、後継者となったジェームズ I 世の時まで降伏しなかった。このときのメリフォント城での条約で宗教礼拝の自由が認められた。しかしこれもまた裏切られる。ジェームズ I 世（1567-1625）は、アイルランドの刑務所から殺人犯とカトリック教徒を解放することは無かった。カトリックの司教は追放され、彼らを保護し、またはもてなしたものは厳しい刑罰が待っていた。カトリック教徒達は国教会またはプロテスタント教会への出席を義務付けられた。英語のわからない住民はこれを見做した。すると罰金が課せられ収税吏はその罰金を自分の都合の良い高さに吊り上げたのである。

更にジェームズ I 世はイングランド王室の宝庫を満たすのに手段を選ばなかった。彼はアルスターの植民といわれる事業で、古代からの土地を所有していたアイルランド人を徹底的に収奪し、土地と共に財産を奪った。

原住民は、イングランド王支持を表明すれば自分達の自由や恩恵に結びつくだろうと信じ込まされ、カトリック教徒指導者会議をしていとも容易に、しかもふんだんに国費の供給をイングランド王のために可決した。これは自己を守ろうとして、相手の好意を期待する現地カトリック教徒達の人のよさを示すものであった。しかし誠実さなど微塵も無い冷酷な王は、支配された人々が期待した恩寵を与えることなど意に介すことは少しも無かつ

たのである。

間断ない対決の連続は民衆を苦しめていった。身分の低い無教養の農民達も、民族の言語や宗教の異なる占領者達が昔からの族長に取って代わるのを見て不満を覚えた。そしてアルスターの大蜂起（1641 年）が起こり、11 年間、島全土が残虐と殺戮の巷と化した。町、村、農民のあばら家が焼き払われ、無差別に子供らも容赦なく殺害されていた。原住民、以前に来て住み着いていた英国人、新たにきた入植者、他の同盟の者達が分裂を繰り返した。こうした状況の中で更なる苦難をもたらしたイギリス議会軍最高指揮者オリバー・クロムウェルが登場したのである。

2) 支配者クロムウェルの統治

1641 年に英国支配に対するアイルランド人の反乱「カトリック一揆」が起こった。ここでプロテスタント入植者が 2,000 人殺された、と誇張した報告が英国本国に伝えられた。この「虐殺」への報復のため、クロムウェル（1599-1658）が 2 万人の精鋭軍を引き連れて派遣された。これが英国の侵攻後にやってきたクロムウェルの統治時代（1649 年から 1658 年）であった。

クロムウェルは国王を頂点とする英国の国教会が、国家の宗教であり、カトリックはローマ教皇を頂点としている。然るに英国にとって隷属的民衆がカトリックであり続ける事は、反国家的であり犯罪であるとした。彼はあくまでも異民族支配者として、現地人との融和を禁止し、法律を制定した。こうして 1649 年夏、クロムウェルの軍隊はカトリック教徒のアイルランド人を大虐殺し、手当たり次第にカトリック教会の組織を破壊した。

カトリック国であるフランスのステュアート朝の支援を受けたカトリック教徒のジェームズ II 世は、アイルランドのカトリック軍を率いて、英国国教会のオレンジ公ウィリアムの軍隊と 1690 年 6 月 1 日ゾロゲダ近郊ボウンで戦った。しかしこの戦いでジェームズ II 世軍は敗退した。その結果を受け、今後このような憂いをなきものにするため、英国が取った措置が「カトリック刑罰法」（1695）に象徴される法律の制定であった。この事はアイ

ルランドの大衆を貧窮と無力に追い込むことになった。カトリック教徒は法律家や医師、教師また軍人や警官にもなれなかった。このためカトリック教徒の学問をする意欲は衰弱し、権力から遠ざけられ、政治に関係することは一切出来なかった。彼らは武器を持てはならず製造や販売も禁じられた。「過酷な刑罰法の下に服従させられ、カトリック教徒はアイルランド議会から排除された」⁽⁵⁾。

「この法律よってもたらされた物質的な被害は大であった」⁽⁶⁾。廃墟は拡大し、何世代にも続いた家族は消えていった。広大な地所を持つ屋敷も壊滅した。しかし最も悲惨であった被害は道徳的な意識の減退が社会を覆ったことである。これによってアイルランド人としての感情や意志の驍が消失し、とりわけ下層階級である農民の人格の性質が墮落していった。社会は無法状態になっていったのである。上流階級は田舎を見捨てて出て行くことになった。多くの中流商人たちは工夫を凝らしてやりくりしつつ生活していくことが出来た。しかし大多数の貧しいカトリック教徒の農民達は困難な中で耐えるだけであった。彼らの宗教が下層民を無法者としたのである。この長い「カトリック刑罰法」の時代に神を恐れるカトリック教徒達は道徳や法を省みない状態の社会を造っていかざるを得なかった。すなわちカトリック教徒達は彼らの信仰に従って礼拝を行うべく、彼らの司祭を秘密裏に匿い、集うことを余儀なくされた。司祭は地下にもぐり、真実が隠蔽された。

3) 大飢饉の社会

この経緯の中で 1845 年頃から 1848 年にかけての天候の不順によるヨーロッパの大飢饉が始まった。アイルランドは 1840 年～1845 年の大飢饉で、国民の 3 分の 1 がなくなり、3 分の 1 が外国に移住していかざるを得なかった。これによってアイルランドは国力の半分以上が失われる惨状となった。大飢饉は 1840 年に始まり地域によって 1849 年あるいは 1854 年まで続いた。この 1849 年あるいは 1854 年の間だけでも保有地を捨てて行か

なくてはならなかった人は総計 50 万人、小さな所有地は 20 万件が抹消された⁽⁷⁾。

この飢饉の直接的原因はジャガイモがこの疫病にかかって腐っていくものであった。ジャガイモは新大陸南米からスペインを経て 1590 年頃アイルランドにもたらされ、当時のアイルランドの農業状態は、ほぼ 3 分の 2 がジャガイモ栽培地であった。だがアイルランド西部の土壌が悪い地域にもかかわらず、この作物は豊かな栽培の成果をもたらし、オート麦などの穀物の代替物として重要な栽培物となった。とはいえしかし、英国本国でこのジャガイモの不作は、飢饉に発展することはなかった。なぜならジャガイモは英国住人の主食ではなかったからである。またアイルランドでも中産階級以上の家庭では、ジャガイモだけでなく穀類や肉などが食べられたため、深刻な問題にはならなかった。アイルランドの人口の 3 分の 1 の下層農民がジャガイモのみに食料の依存をして食いつないでいたこと、それに支配者による対応の悪さ、(政治的、経済的、衛生的な)により、困難な事態は更に悪化させられた。

このジャガイモの疫病時代は政治的対決の舞台でもあった。富裕な家系の出身者であった D'niel O'Cokonel は連合王国憲法を「破棄されるべき法令」(Repeal of the Act of Union) であるとして、巨大な政治運動を始めたが、結局この運動は 1847 年彼の死亡と共に挫折してしまった。この後、急進的なアイルランドの若者グループがこの運動から脱退して 1848 年に武器を持って反抗しようとしたがこれも失敗した。

最も被害を受けたのはアイルランドの下層階級であった。彼らは主食がジャガイモ中心であり、この困難な飢饉の時期、とうとう自給は不可能となった。1846 年にジャガイモ価格は 4 倍にもなったため、彼らの生活はどん底となる。それはほぼ 100 万人の人々の餓死と病による死亡者をもたらした。1841 年 820 万人であった人口は、1851 年には 680 万人となってしまったのだ⁽⁸⁾。大飢饉の到来は、この民族を海外へと離散させる運命をもたらすものであった。1847 年の Gregory Clause of the Poor Law (アイルランド貧民法)

により4分の1エーカー以上の土地をもたない農民は労働者住宅に入る事もできず、公的支援を受けて住宅に入所する資格もないと決定され、このため多数の小作農民達がこの飢饉の結果外国へと移民を決意させられた。移民で生命をなくした人々もいた。その数は確実なことは不明であるが、100万人以上が移民となったと推定されている。なおこの移民もだまされて悪条件下にアメリカ、カナダ、オーストラリアなど外国に強制移住させられることもあった。現地での過酷な状況のゆえに犠牲者も相当数に登った。一説では120万人を超えると思われるようであるが正確な記録など無く、具体的な数は把握出来ていないといわれている。

しかもこの疫病・飢饉の時代中、アイルランド農民は食料輸出を強制される。その結果国の活力も低落し続け、この地域は荒廃し、文化と伝統の衰退と挫折による次世代への莫大な被害をこうむり、人口は飢饉以前の半分のレベルとなってしまう。死亡原因は餓死ではなく、栄養不足によるチフス、回帰熱、赤痢など伝染病による死亡者であった。この状態は現在西部地域でやっと2006年、すなわち飢饉以来160年たって、現在ようやく歯止めがかかった人口（約420万人）となっている。

4) 自由アイルランドの建国

死に至る窮乏の中で、巨大な税の厳格な取立てが飢饉の病気の拡大を更に悪化させていったため、社会的な混乱を更に拡大した。はしか、下痢、寄生虫による腸障害、結核、あらゆる呼吸器感染、百日咳や、天然痘、インフルエンザ、赤痢、コレラ、栄養不足の失調症を拡大させた。

こうした事態に対して英国議会の対応はつれないものであった。この事は1848年アイルランドの国内でYoung Ireland Partyとなって若者達を立ち上がらせたが、結局失敗した。そして約70年後の第一次世界大戦が始まる1916年の復活祭のとき、アイルランド共和国は樹立の宣言と共に武装蜂起したのである。この時もなお、市民の支持が無く、最終的には鎮圧された。ここで指導者達が処刑されたことから、市民がやっと目覚め、

反英感情の高まりを示し、徴兵法制定の動きに反対の社会的風潮とあいまって、1918年シンフェイン党がはじめて独自の議会を開き、やっと1921年英国・アイルランド条約によって26州（北アイルランドを除く）がアイルランド自由国の建国を実現したのである。その後もなお内戦など紆余曲折があったが、1930年からアイルランド共和党が担当政党となり、政権を担うことになる。1955年には国際連合への加盟も承認され、1973年欧州共同体（EU）に加盟、アイルランドは独立国として現在に至っている。

5) 最大の悲劇の中での慈愛に満ちた看護の実践が始まった

アイルランドが長期間英国の植民地であった現実と、人口の90%がカトリック教徒であることは国民の生活を不幸にした。このことの意味は大きい。とりわけ大飢饉の広がった時代が残した負の遺産としての爪あとを見てきたが、この負の遺産である歴史と時代の中から、逆説的な正の遺産が生みだされたことを見落とすことは出来ない。

アイルランドの人々の荒廃と絶望の只中から、人々の心に希望という名の灯を燈そうと、神の慈愛を実行に移した、強い信仰を持った1人の女性がその主役となった。それはアイルランドの一人の女性メアリー・エイケンヘッド（Mary Aikenhead 1787-1857）の活動である。つまり、最悪の悲劇の中から後世において暖かい慈愛に満たされたホスピスの原型が生まれたのである。万事に裏と表があり、夜と昼がある。自然にその様になると手放しにはいえないだろうが、今から思えば、最悪の悲劇の中から、後世においての心にくいまで暖かな慈愛が示される原型が生まれ出たのである。歴史の逆転の事実を学ぶことが出来るようだ。

2章 ホスピスの理念はどのようにして マザー・エイケンヘッドによって 基礎付けられたか

1) メアリー・エイケンヘッドの生涯⁹⁾

メアリー・エイケンヘッドは1787年1月19日に医者であった父 Dr. デイビッド・エイケンヘッド (David Aikenhead) の長女として生まれた。父方の祖父はおよそ50年ほど前スコットランドからやってきた人であったといわれている。すなわち英国本土からやってきた英国国教会の支配階層の一員であった。父親も無論プロテスタントであり外科医師であった。彼が街に住むことを許可され、職業として医療を生業としていたのは、メアリー・エイケンヘッドが生まれるほんの数年前だった。当時の記録によればこの頃アイルランドのカトリック教徒は、更なる英国の植民地政策が厳しさを増し、恐ろしさで呆然としていた状態であったという。しかしながら、これにもかかわらずカトリックの盛んな場所であるコークのような港町は特に、カトリック教徒も自由に商業を営んでおり、彼らの上品な生活が営まれていた。

英国国籍の Dr. デイビッド・エイケンヘッドは、町で裕福な商人のカトリック信者の娘メアリー・スタックポールと結婚した。何処で結婚式がなされたかの記録は残されてはいない。しかし当時の男性として、また支配階級の一員として、ほぼ確実にプロテスタント教会で式を挙げようと主張した事は確実であろう。しかし彼は心の広い率直で勇気のある人物に相違なかったし、また彼の娘として生まれてきたメアリー・エイケンヘッドが豊かな生活を送れる事も確かであった。そして多分彼の妻となる女性の幸せをカトリック教会で内輪に祝ってもらう事も可能であったであろう。

メアリー・エイケンヘッドは彼らの最初の子であった。そして彼女はプロテスタントの一員として洗礼を受けたが、彼女のあとに続いて3人の妹弟が生まれた。Mrs. エイケンヘッドは気の弱い女性であるといわれていたらしい。しかし彼女の子育てに見る判断は的確なものであったことが分

かる。

メアリーが生まれたほんの数週間以内に、奇妙な現象が起こった。Dr. と Mrs. エイケンヘッドは幼い娘をコークの上流社会地区の家から、労働者達の住んでいる地区のジョンとメアリー・ローク (John and Rorke) に預けて世話をしてもらうために、彼らの馬車で出かけていった。それは乳母になってもらうためであった。

その意味は、自分の子供を失ってしまった貧しい家庭の女性が、他人の子供に母乳を与えて育児を手助けをするというものであった。このようなことは上流階級の人たちの間ではごく普通のことでもあった。しかしメアリー・エイケンヘッドは6歳になるまで、本当にローク家で育てられたのであった。ローク家の人々はカトリックの仕方で祈りを教えることをメアリーの両親に認められていたばかりか、彼らと共にカトリックの信仰生活の基本原則を身に付けられるように、毎日の生活の中で教育してもらうことを要請されていたようである。メアリー・エイケンヘッドはローク家の家族と一緒に、毎日曜日にカトリック教会でのミサに出かけていった。彼女の両親が馬車に乗ってプロテスタントのシャンドン教会に向かっていたとき奇妙な小グループに追いつくと、その中に自分達の娘がカトリック教会に向かっている途中であったようなことがよくあった。両親は馬車を止めて娘を自分達の馬車に乗せて連れて行ったこともあった。

そのような折、メアリー・エイケンヘッドはいつでも“いやだ”“行きたくない”といったという。成長したメアリーが、両親の住む自分の家に帰ったとき、ローク家の人たちもメアリー・エイケンヘッドと一緒にやってきた。Mrs. ロークは4人の子供達の子育ての手伝いをし、夫は馬小屋や庭や家の仕事をするためであった。メアリーの人生においての全ての話に、納得のいく答えを見出すことの出来ないような問いが一杯ある。娘のメアリーの宗教的な信条の問題について、母親の Mrs. エイケンヘッドは長女メアリーだけは、少なくともカトリック教会から全く関係がなくならないようにしたい、という工夫からローク家にメ

アリーの育児を頼むという工夫を凝らしたのだろうと推測することもできる。全ての子供達が里子に出されることはなかったのは明らかであった。もし母親の彼女がこの目的を持った上で長女を里子に出したとすれば、それは夫が社会的な地位を脅威に晒されることもなく、この意見に賛成することが前提でなくてはならないのである。両方の条件が満たされてのみこのような工夫は唯一実現できるものであった。

父親の Dr. エイケンヘッドは死の間際にカトリックの信仰に改宗した。これは彼がかなり前からカトリック信仰に密かに理解をもっていた事の証にはなるであろう。しかし私達が知って驚くことは、先に見てきたこの時代の劇的にアイルランド社会が2分割されていた困難な状況の最中に、メアリーが両方の境遇環境に通じた心情の中で育てられたという重大性である。

19世紀の鋭い冷酷な観察者として有名な歴史家 Alexis de Tocqueville は彼の第一級の政府公認の解説を述べている著作の中で、メアリー・エイケンヘッドの若い時代の頃の英国とアイルランドの社会状況において、当時の貧しい人々の状態が如何にひどいものであったかについてのべている。それによるとアイルランド以上に、最近のヨーロッパで行われた社会的不正義、専制、残虐さがこれ程ひどく行われた所は他にはなく、単に悪い側面だけしか見るべきものはなかったと書いた。メアリー・エイケンヘッドが彼女の修道女会を創立して何年か後の、1830年代の頃のことである。

メアリーが自分の家に帰ってきてから彼女はプロテスタントの生活をし、家族の人と共にシャンドン教会の礼拝に出席していた。彼女の本来の成り行きからすれば、彼女はアイルランドの社会での晴れ晴れしい結婚が約束されており、おそらく哀れみ深い心の必要を満たすために、副業としていくつかの慈善事業をしながら、上流社会の見本となるに相応しい生活が保障されていたに相違なかった。しかしそのようにはならなかった。なぜなのだろうか？ 人格形成の過程で多くの影響は与えられるが、最も重要な影響とは初期の子供の時代に関連する事柄が、この上なく重要であると

いうことがここに認められるのであろう。メアリーは幼い日をロック家で過ごした。彼らは当時の原住民の生活レベルよりは明らかに物質的には上のレベルの人々であった。メアリーの両親が支払う養育料が彼らの生活を助けていた。しかし彼らと共に生活することによってメアリーの最も大切な発達形成の年齢の時に、彼女ははるか離れた両親の住む世界より、里子として育てられた現実の世界に身近さ感じ取り、彼女の生活しているクラスの身近な宗教に親近感を持ったのである。ある意味で彼女はこの事を心内で経験し成長したが、アイルランドにあった2つの国家間の分裂を心理的にさほど苦にすることがなかったのは、彼女の育まれた幼い日々の初期の状態が、彼女のその後に対して決定的に影響を与えたのであったろう。

果たしてそのようであったとしても、彼女は自分が二つの世界のあることを日頃認めていたのは当然前のことで、別に非難されるものではないだろう。これは今日の第三世界の巨大な悲しい現実の直面にしつつ、私達が日頃そう知りつつ自分達の日々の生活と戦って過ごしている事と同じである。しかし成長していく過程の中でメアリーが出来なかったことが正にこれであった。彼女は見たばかりではなく、教会で日曜ごとに詳しく説明されたキリストの教えを聞き、彼女の周りに見られる生活の矛盾について敏感に感じ取ったのであろう。難問題の前でひるみ、きびすを返して去るのは彼女の流儀ではなかった。彼女は幼い頃から自分の力で出来る小さな行ないをすること、食糧の贈り物を携えて、かわいそうな家族に希望の息吹を運び、親切という香油や薬や親切な言葉をかけることを好んだという。彼女がこのような慈愛を届ける行為をすることを両親も同意していたに違いない。

深遠なる感動を与えられたカトリック教会の説教を聴いたとき、メアリーは15歳であった。テキストはルカ伝16章19節～31節に出てくる「富むものとならざれ」の例え話であった。豊かな者は、富とこの世の楽しみで満ち足りていたので、まずしく門前で物乞いをしているこの男ラザロに彼は単に無関心であったばかりか、この男のこの

ことを見てみぬ振りをし、無視していた。宗教団にいた若い少女がこの時まで、コークの街中のまずしいラザロを見出していたといえるかもしれない。しかしそれだけでは十分ではなかった。説教が彼女の心に既に語りかけ、その結果として、彼女の魂が奪われることになった。問題に対する決断へと彼女は到達した。すなわちカトリック教徒になることとなったのである。メアリー・エイケンヘッドの伝記によれば、1802年6月2日——ビジテーション（Visitation）の祝日に——彼女はカトリック教会に受け入れられ、アイルランドの全ての病んでいる人々を自分のラザロとして抱きしめたのである。

メアリーの道は困難に満ちていた。貧困者救済に専念する仕事に彼女は加わったのであるが、少しも解決の糸口が見出せなかった。アイルランド全国にはわずかし宗教団はなかったし、治安上の事情から宗教衣服を身に着けることは公に禁止されていた。コークにはたった二つの修道会しかなかった。そのうちの一つが学校を運営し、他の一つはもっぱら子供達の福祉のために打ち込んでいた。もし神がそう命じられるのであれば、この後者に彼女は属することになったであろう。彼女がカトリック教徒になる前に父親は亡くなっていた。彼女の母が亡くなったとき、彼女は家族である幼い妹や弟の面倒を見ることが当然であると考えた。しかし彼女は25歳の時神の召命を自覚した。この日まで、メアリーは数年間虐げられた人々の中で友人としてカトリック教会司祭のダニエル・ムリー神父（Father Daniel Murray）の仕事を手伝っていた。Father Daniel Murrayはダブリンの大司教となった人物である。彼らはアイルランドの全ての貧しいひとの救済をする目的を持った新たな修道女会を始めるための方策を求め続けていたのである。ムリー神父が大司教になったとき、彼は極めて率直に自分はメアリー・エイケンヘッドを創立者として考えていることを彼女に伝えたのである。彼女の心は極自然に先ず初めそれを断ったのであった。しかし大司教ダニエル・ムリー神父は、“手に負えそうにない任務のため、彼女は神の道具である”との彼自身の確信を受け

入れるよう説得を続けた。この任務を準備するためにメアリーはもう1人の若い女性と共に3年間に及ぶ修道女の修練を受けるためヨークのInstitute of Blessed Virginnの（the Loreto Sisters）にあるロレッタ修道女会（Bar Convent）に行くことが準備された。

彼女は1815年これを果たし、家庭へと帰ってきたのであった。そして先ず修道女として、それから全職員の総指導者として歩んでいくことになった。これから40年という年月がメアリー・エイケンヘッドの修道会建設の前途に絶え間のない戦いや貧困、病い、など苦勞の多い労役が待ち構えていた。

なおメアリー・エイケンヘッドの残した修道会の後継者達が、彼女の信念と実践を受け継いだ。それは現在のロンドン下町のハックニー（Hackney）にある聖ジョセフ・ホスピス（St. Josef's Hospice）の創立に関係してくることになる。ここはメアリー・エイケンヘッドが理想とした精神を受け継ぎ英国本土のロンドンで最初に創立され、現在まで発展してきている施設である。

3章 アイルランドのホスピス

以下に述べるホスピスは筆者がアイルランドで訪問した施設の内容である。

1) 近代ホスピスの設立

この施設は、上述した経緯の中で最初にメアリー・エイケンヘッドがアイルランドのダブリンハロルドクロス・ブラックロック（Harold Cross & Blackrock）に1835年設立したものである。大飢饉の初期、ハロルドクロス・ブラックロックで聖ヨセフ教会の付属施設として、8棟の病棟が設けられ、身寄りの無い人の終末期看護の面倒を診たのがはじまりであった。ヨーロッパで一番ふるいホスピス施設といわれる由緒ある施設だ。現在も世界中の医療関係者がここを訪れて、心のこもる配慮が実践されている施設の活動状況を見学している。

1879年聖ヨセフホスピスは（St. Josef's Hos-

pice) をアワー・レディー・ズ・ホスピス (Our lady's Hospice) と改称した。これが近代ホスピスの始まりであった。また現在も市民を対象とした連帯意識の啓発と協力団結のための施設 (討議室・教育棟までである) が整えられている。

ここで説明を担当した看護部長・教育部長・チューター・ノーリン女史 (Norin holand) によれば、修道会である Irish Sisters of Charity が 1879 年にこのホスピスを開設したときには、霊的な救済を主にしていて、医学的な治療の要素は少なかった。個人で開業している医師たちがコンサルタントとして無料でこの活動に関わっていた。シスター達は弱った患者の身の回りの世話をしていた。

当時は無論鎮痛剤など無く、病をひたすら我慢し、その宿命を受け入れることを薦めるしかなかった。メアリー・エイケンヘッドたちの行なったことは教会中心の生活の基盤に基づいて、信仰によるキリストの愛を注ぐものであった。現在もこの施設に関わる人々は教会中心の生活の基盤についての 2 週間にわたる講習を受け、その基本理念を学ぶ事が求められるという。

当初この施設の患者は多くが結核の末期患者だったのだが、現在は結核で亡くなる患者は劇的に少数になって、代わりに老人への対応が必要となってきた。イグナティウス・フィーラン修道会院長が 1974 年に派遣されてきた。彼はガンの死に対する施設が無いゆえそれへの準備がなされなくてはならないとして、修道会のトップにこの施設の改革を提言した。そして英国にこの事を要望した。その結果 1980 年にガンの管理センターが 42 床の準備の下に開設された。その後に医師も派遣されて今に至っている。1985 年ホームケア・チームが出来た。英国で学んだ成果である。現在 80 歳になるシスターのイグネシアスがホームケア・チームの担当であった。更にフランシス・ローズ会長も自らマネイジメントの任を担うという。2 人ともに Man of the year となり、受賞していた。

シシリー・ソンドースがロンドンのハクニーにあるホスピスと St. ジョセフホスピスを見に行き、相互に訪問し交流を図ることが取り決められた。現在は会運営のための理事会がこの運営の中心

である。理事長はシシリー・ソンドースであったが、彼女の同僚のナースでコーディネーターの友人が医師団や施設の運営に当たる任に就いているという。

この施設の現在の状況は、拡張ケアユニットの急性期でない患者のための看護部門 94 床 (ここは病状を確認後再活性化し、リハビリを受けた後再び家に帰る患者の準備をする) とリュウマチリハビリ部門 50 床である。

医師は併設のセント・ビンセント・クリニックから診療に来てくれている。更に緩和医療ユニットが 1993 年に開設され 46 床である。そのうち 36 床はデイホスピスである。緩和医療は 1989 年にコンサルタント医で緩和医療の専門家の Dr. ミカエル・カーニーが治療の為の活動許可を与えられた。そして現在は彼と 3 名の専門の Dr. たちがここで治療に関わっている。

ここで働く看護師は緩和ケアのための講義を 30 週、1 週間に 5 日の講習を 6 回受けなくてはならない。1992 年にはダブリン大学の医学部ではこの緩和ケアのための講義教程が必修の教科目となった。なおダブリン大学で多職種の関係者達がチームとして緩和ケアに参加するとの方式をはじめて取り入れた治療を行った。

デイサービスについての実際の話が Ms. ゲラルド・トレイシー (Gerald Tracy) 女史により行われた。彼女は 11 年ここに勤めている緩和ケアの院内サービス・デイケア・ホームケアの仕事をしている看護部長である。ここでは進行がん患者が多いが、ここに送られてくる患者は家庭での在宅患者であったり、病院で治療している患者でホスピスに入った方が良いとされた患者、家庭介護の看護師から紹介があっての人、院内ナースが送り込んできた人、自分から頼んできた人、家族の勧めで入所してきた人などいろいろである。地区の管理医師に書式にしたがって嘆願をし、どのケアが希望かを申請して審査を受けて入所が許可される。HIV の患者も以前はいたのだが、現在は HIV 患者は薬の使用で元気で働くことが出来

るようになったのでここにはいない。ここではガンの痛みの症状コントロール、ショート・ステイ、リハビリや継続的治療などの対応が取られる。

この施設に関わる患者の数は年平均 170 人以上である。

地区担当医とこの地区担当のホームケア看護師の両者が主要チームとなる。並びにこの施設に所属したサポーターたちが、患者本人や患者の家族を精神的・社会的に充実したチームでサポートしている。ここは患者の個人的な希望に応じて、デイホスピス、リハビリ、治療的緩和などの対応をすることが出来る。老人用の専門緩和ケアを希望してこの施設に頼んで来る人もいる。この地区には 200 人のボランティアがいるが、この施設には常時 15 人のボランティアがいる。しかし自分の家で最後を迎えたいと望む人もおり、それには看護チームがサポートする。「出来る限り家にいたい。しかし最後は病院で」と望む人もかなりいる。しかし半分以上の人は自分の家で最後を迎えたいと望んでいるという。

各病棟では週 2 回医療ケアと社会ケア・家族支援の会議が開かれる。患者とのインタビューからその状況や家族に問題があるかないかなどが検討されることになる。このとき医師をはじめ看護スタッフ、ソーシャルワーカー、セラピスト、宗教等関係者が集まり、プログラムがチームとして企画され、数週間にわたる支援が行われる。そしてその結果のチェックとプログラムの妥当性が論じられ、修正が必要な場合は正される。

次にトミー・モリス (Tomy Moris) 氏医療社会福祉士は社会的支援について説明してくれた。ホスピスケアは病の状況に応じ、患者と家族の間にあって、両者のバランスをいかに計画的に行っていくかということも重要である。つまり患者と家族の人の全体の対応が重要である。治療に携わるものは自らの全人格をあげて調和を患者と家族の人にもたらさなくてはならない。その家族に対しては謙虚に接し、専門家であるとともに謙虚に己を知り、自分の生活にバランスがとれ円満に生活していなくてはならない。生命に関わる患者の

心への対応は、論理的な医学的マネジメントと情緒的な段階をうまく経過させてあげられるよう、希望に対しての霊的な支援など実的なこまかな対応が必要に応じてとられなくてはいけない。そして患者自身が納得した死を迎えることが出来るようにするために、家族の人の健康を守る配慮の必要もある。

特にケースワーカーは患者と親密になるために意を配ることが必要であり、また直接に関わりを持つ介護者は、患者の考えることを重視してはいけない。今の状況で達成可能な状況を想定し、すべてを整理しゴールに結びつけるようにすることが求められる。

自分が死ぬのだと誰にも言いたくない。同時に家族のものも患者本人が死を認めたくないと考えている。このような時、家族の心のケアも必要なのであり、避けられない死に向かって皆が準備できるように配慮してやらなくてはならない。

実際になくなった家族の例を挙げれば、連れ合いとなる主人を失った場合、夫との出会いのとき以来の残された問題を整理し、こころの痛みを癒す努力が行われる。週に 1 回 1 時間から 2 時間くらいのカウンセリングがなされる。2~3 回で癒される人と、1 年にわたる人とがいる。

ホスピスという言葉が意味するところは建物を言うのではない。人の心の内奥に於いて展開されてはならない哲学の活動であり、サービスがなされるべきところである。すべての要素を受容し、将来がよりよい状態になることを祈りつつ実行する場である。独居の患者や認知症の患者も法律的配慮がされるべきであり、長期の計画ある活動を通じて、ソーシャルワーカーと患者を含むすべてのひとが連携をサポートしていくことが行われるところなのである。

最後に Dr. ブレイン (Brian) 氏が緩和医療の医師としての活動説明をしてくれた。

彼はアイルランドで 5 年間病院に勤務の後 5 年緩和ケアの仕事につき、アメリカテキサス州のクリーブランド大学やイギリスの研究所で働いた。その後このセント・ビンセント病院 (St. Vincent hospital) にきて、今はこのスタッフで

あるという。緩和ケア医学の全領域を学び終了した彼の言葉は簡潔なものであった。

ここに来る人は治療が出来る余地はほとんど無い人である。しかしその症状の苦痛や恐怖を軽減することは可能なのである。心が安らげる状態を作ることがとても大事な事なのである。4世紀頃の巡礼の人々にケアをした時以来、長い年月をかけシシリー・ソンドースが1967年現代ホスピスを実際に誕生させた。困難な患者と家族の人への支援は緩和医療の活動に対する社会の理解と協力があって可能なのである。このため社会の人々に対する教育活動は大変重要なことなのである。この点で英国は緩和医療の医学的分野でも大いに発展出来てきているが、なお今後の65歳以上の高齢者の増加が大きくなるので、ガンにかかる人の数が更に増えていくことが予測される。早期診断の後に、病と共存しなくてはならない人も増えるし、ガン以外の肺疾患やその他の病の増加も予測されている。2002年この地区では3万人死亡したがそのうち7,000人は進行ガンであった。実際これからは4〜7割の患者ががん患者となり、緩和ケアを受けないといけないう状態となる。なお現状では、急性期病院から緩和ケアの依頼が多くなされるようになった。またホームケアのチームも地区によって、十分の所とまだ充実して行われない所があり、この格差の問題は今後の課題である。在宅の患者で緩和ケアが行われない所に住んでいる人もいる。このような人はチームの訪問看護師が施設に入ることを進め、必要な処置を役所と打ち合わせ病院に入院する手立てを考える。緩和ケアに対する対応の出来る部門がある所と無い所があるという格差を今後解消しないといけないう。何処にいても平等にケアが受けられ、カウンセリングがなされ、悲嘆サポートがなされる必要がある。しかし現状ではガン以外の人までこうした対応が今後出来るというのは難しいことである。今の倍以上の施設と膨大な資金が必要となろう。まだ緩和医学の専門医師、開業医（地域医療医師）も不足している。また今後すべての医療従事者への教育が更に行われる必要もある。平等なサービス、患者中心のケア、緩和ケア医療の専門医を中

心の総合的なチームが更に必要になる。

また腫瘍科、放射線医学科などと協調していく必要がある。資金面でも寄付など不安定な資金に頼っていることが将来どうなるか問題であろう。ここの入院患者の90〜92パーセントはがん患者、内50パーセントは退院して在宅などに移る人、残りの50パーセントがここにいるかその他の最も自分にとって良いと考えられる所に移る。

ここに入所している各患者について毎週一回、その様態の報告と今後の対応などが話し合われる連絡会がもたれているという。

2) 聖フランシス・ホスピス (St. Francis Hospice)

ここは1979年創立のホスピスであった。最初は個人的な寄付金を基金にして始められたが、先ず最初に主任管理者エーテル・マッケンナ氏からこの施設の方針の説明がされた。資金は政府援助が7割だという。年750万ユーロ（約10億円）と募金・寄付金が3割である。またアイルランドホスピス協会が10月の初め頃、Nation coffee morning という日を年に1回設けてその日の売上代金を協会に寄付してくれる（およそ20万ユーロ、約3,000万円）。つまりそうした行事への市民の共通理解が社会全体に行き渡っている。その他資金集めのため、ひまわりバッジ、クリスマスベル・バッグ、マラソンの主催、ゴルフクラブ主催の協力行事の開催などが時期に応じて企画され、町のあちこちには寄付金のための募金箱が設置されるなど資金が寄付される。こうしてホスピスの社会的認知度が高いため基金は結構集められる。

緩和医療とは次の項目に象徴される視点で行われることが大切である。すなわち価値観（使命目標）：1. Dignity 尊厳、2. Compassion 情熱、3. Justice 正義、である。この理念にたって日々の活動が展開されているわけであるが、この施設の受け持ち範囲はダブリンの北地区の住民であり、患者、家族、友人が互いに絆を確かめ合うことが出来るにできる場所がここであるという。理事長、所長以下、医師、看護師、並びに在宅看護グループがいて、彼らは日程に従い現場に出かけて活動

しているということであった。社会に向けての啓発教育の活動は重要であることが強調された。どこの施設に行っても‘教育施設’[Edukation Center]と書かれたプレートが大きく掲げられた会議場のような場所が用意されていた。建物の中の大きな区画であったり、いり口の目に付くホールの部屋がそうであったりする。世界中から訪れる人々は決まってこのホールで、現在ここで行われている活動状況を数時間にわたり講義を受けることができるのである。

この施設の概略が説明された後、次に緩和ケアの専門家・症状診断・トリートメント処方・トリートメントの強化・全人的患者ケアの推進・家族のサポートなどを中心に活動している専任の医師 Dr. マクミラン (Regin Macquillan) 氏の説明があった。ここのスタッフは症状の診断、治療の見通しと判断、患者を中心とした総合的な治療、家族の支援を考慮することなどが医療的な分野のいわゆる医学的治療と考えているとのことである。医者養成は、2つの領域での認定が必要とされる。①在宅治療の一般的医学いわゆる開業医の登録と②特別な専門分野の IPU 登録のための訓練である。その他、作業療法部門と物理療法などでの対応がされるのだという。

今後の必要事項は分野の異なる一般医学の研究と同時に、緩和医療研修がなされるべきである。理学療法と作業療法が関連的同時並行的に積極性を伴って検討されることも必要であろう。

そして最後に看護面での担当の看護部長で、専門医学看護師・治療師のマーガレット・キャッシュマン女史がデイ・ケアのホスピスについて説明してくれた。

ここダブリンにはホスピスが3つあり、170万人の住民を現在3地域で分割して担当している。このホスピスはダブリンの北の部分の住民55万人を受け持つものである。この施設の緩和ケアのためのベッド数は、19床、20人のナースが看護活動をしているが、入院は無料である。この施設では在宅のケアやデイ・ケアの看護もしている。しかし他の病院や開業医・老人ホームの要請などから依頼があれば、臨床専門看護師、補助看護師、

ボランティアの人々が患者の看護対応に取り組むことが必要となり、状況に応じて実行されている。

ホスピスでのケア活動は専門ナースが対応を取り仕切り、月曜日から木曜日まで毎日デイサービスに来所する17名の患者に、35名のボランティアや送迎の選任ドライバーが日々サービスしている。ホームケア・チームが支援し、ボランティアも参加する。ナースの勤務は週39時間、専任 Dr. や開業医、コンサルタント医師は週33時間、状況により27時間まで勤務時間が加わるときもある。ナース・ホームは、お金がかかるので大体普通は公的病院に行くことになる。

在宅ケア・サービスの事情を見ると、170軒(年間約600軒)の在宅の患者をこの地区の東と西に分けた2チームが分担して受け持っている。東の担当地区について見ると、メンバーに医療長の Dr. がディレクターをし、チーム看護師長・チーム看護師、ボランティア、(この場合ボランティアは週に4日位)が参加する。そしてどのような対応をとるのかについて、施設での一般看護に入るか訪問看護にするか、どのくらいの頻度で家庭を訪問するかなどの点について、センターの Dr. を中心に看護師長・看護師が実情を検討して決める事になる。ここでは60パーセントが在宅のケアである。

またガン専門ナースが介護の状況に関係し、必要に応じて地域の家庭医と連絡を取りつつサポートしてもいる。死亡診断書は医師がその場になくても、医師の証明があればよいことになっている。

また教育部門でスタッフとボランティアに対する教育が、あらゆる機会を利用して、たとえばネットでの情報の発信や更新図書の配布などにより行われる。ワークショップなどの折にスタッフへの教育もされる。

年一回の在宅ケア活動のための国際会議がダブリン城で開かれる。大学の医学部では緩和医療のための大学院での修士号が今年10月から出されることになった。更に知的障害や老人学、腫瘍科緩和医療教育も修士課程博士課程のコースを取る学生のための支援をしていくことが決められた。

海外からの研修者や研究者への支援もすることになっている。こうした研究者への地方行政からの支援が受けられる場合もあると説明された。

4章 まとめ

最後にこの論文の内容をもう一度概略して終わりとしよう。この論文では、第1章はアイルランドがいかに過酷な歴史を辿ったかその経過を概略展望した。

そしてその歴史の詳細を行政、経済、法律の施行、など具体的な民衆の生存状況を歴史の記録にそって概観展望した。

第2章は1人の女子修道士、メアリー・エイケンヘッドの伝記を通して、この女性の生い立ち、この人物の決心、修行、実行を追い、困難な人々の心に希望の灯火を燈すことになった歴史的経緯を論じた。

それから第3章では、その活動がアワー・レディーズ・ホスピス（Our Ladies' Hospice）や聖フランシス・ホスピス（St. Francis Hospice）となって今日のアイルランド社会や世界におけるモデルとして活躍している現状を報告論及した。

ところでわが国の医療界が「終末医療」についてどの程度の認識を持っているのかについて、先日2008年10月末のNHKの医療現場の課題として医師達の「がんの末期患者に対する麻薬（モルヒネ）の使用」をどのように考えるかについて、日本医師会の現状が伝えられていた。結論的に言えば、治療現場の医師達の間でこの問題に対する意識は未だ低い。これまでモルヒネ使用に「習熟する事」を重要と認識していないのみか、むしろそれを中心に考えることはできれば避けたほうが良いと考えることこそ正常であるとする実情が報じられていた。もちろん麻薬（モルヒネ）の使用は、健康で正常な場合の人の認識からすれば決して認められるべきことではない。しかし、ヨーロッパなどの先進国では、終末期のがん患者の場合「最後まで前向きに生きることを望み、ある人は神と共に再生の希望を持って、悔いない最後を

感謝して命の最後まで積極的に生きる事がホスピスの役割である」という考え方が、社会的認識の前提にある。この場合は、モルヒネが患者の終末期の困難な状態を救う極めて有力な手段であり、最後まで苦痛を少しも伴わずに快適に臨終を迎えるために、治療者は病む患者の気持ちになって必要なあらゆる手立てを惜しまない。患者への好意と献身の姿勢を持って、必要な緩和のために全力を投入するのが医師としての対応の基本であると、これまで訪問したヨーロッパの終末期医療施設の医療関係者たちは考えて実践している姿があった。

特にイギリスやドイツでは医師の養成コースに疼痛緩和のための手段としての方法に、モルヒネの使用の知識と技術が不可欠であり、そのための医師になる基礎知識として、必修科目としての講座が設定され、全員がこの単位を取ることが義務付けられていた。わが国の現状は極めて遅れている。麻酔科の医師が少なく、ホスピスの普及もまだまだ低調であり、国を挙げての認識向上が今後の高齢化社会のためにぜひとも必要であると思われる。

今後高齢化社会では人の最後をどう迎えるかが問われていく。この社会状況は先進国を初めとする国家間で更に解決のための努力が急務になりつつあり、深刻化していくであろうと予想される。上記に見てきたアイルランドの国が背負った長い困難な道、その苦勞が、1人の女性の名と共に、人類規模の視点から世界の歩みの導標となった。メアリー・エイケンヘッドの、そしてインドのMother Teresaの活動に困難な患者への対応の仕方の指標が示され、ホスピスで終焉を迎える人々が、恩恵をこうむることになってきている。“心の温かさ、人間の尊厳、生命の尊さ”など、耳障りの良い言葉が巷に溢れかえる。しかし口で言うのは簡単で、しかし実際にその実行を裏付ける「心のあり方」が問題だということの重みがアイルランドの国が背負った長い歴史の重さであったし、それを受け止めた1人の女性の真剣さ・その原動力となった無私の信念の根源（信仰）の意味の重さと情熱がその根本にあった。高邁な、真摯な、謙虚な崇高な心像にふれ、ここに真理がある

と感じ、それに向かおうとの決断が、この女性の生涯を通じて困難な道に光を燈す道標となった。彼女は当時のそれなりの社会的地位の階層に属し、何不自由を感じることなく暮らすことは十分に出来たはずである。しかし彼女は、同じ町コークの街中のまづしい男“ラザロ”を見出していた。場末に見捨てられて絶望の中に住む、飢えて貧しい何千もの不幸な人々に手を差し伸べる、キリストの教えを実行に移した。彼女のそれ以後の生涯の中心は‘神の高貴さと貧しき者達の苦しみ’であった。「…聖徒パウロの Caritas Christi urget nos ‘キリストの慈愛が我等を駆り立てる’。…はメアリーの修道会のモットーとなった」⁽¹⁰⁾。

こうした意識の基盤から出た人々への奉仕活動が「主イエスの慈愛に駆り立てられて」、どんな貧しい人でも安らかに安心して最後を迎えられるという、実践的社会的対応の組織を構築することは並大抵のことではない。メアリー・エイケンヘッドが弱者の立場に立っての善意と奉仕の心を掲げて実現した活動が、今ヨーロッパから世界の国々の終末の生き方をサポートする医療のホスピス・ケアとして伝えられ広がっている。

《注》

- (1) 岡村昭彦, ホスピスへの遠い道 — 現代ホスピスのバックグラウンドを知るために —, 春秋社, 1999, 11, p. 236.
- (2) 同上, p. 186.
- (3) 愛蘭土紀行 司馬遼太郎 海道を行く 30 中興文庫, 2007, pp. 38-39.
- (4) 岡村昭彦, ホスピスへの遠い道 — 現代ホスピスのバックグラウンドを知るために —, 春秋社, 1999, 11, p. 191.
- (5) ‘Catholics were subject from 1695 to draconian penal legislation and expulsion from the Irish parliament.: A short History of Dublin by Pat Boran. Mercier press 55a Spuruce Avenue, Blackrock County Dublin, 2000, p. 55.
- (6) The material damage suffered through The Penal Law was great....The penal Law brought lawlessness,, dissimulation and re-

venge in their train, and the Irish charachter, above all the charachter of the peasantry did become degraded and debased. The Irish Famine: The Irish Famine Curriculum Committee, James Mullin, 757 Paddock Path, Morestown, NJ, 1998, p. 22.

- (7) The Irish Famine Curriculum Committee, James Mullin, 757 Paddock Path, Morestown, NJ, 1998, p. 57.
- (8) *Ibid.*, p. 68.
- (9) Mary Aikenhead (1787-1858) Servant of the Poor Founder of the Religious Sisters of Charity Written by Donal S. Blake cfc 2001, Caritas 15 Gilford Road, Sandy Mount, Dublin, 4, 2001.
- (10) Mary Aikenhead (1787-1858) Servant of the Poor: Founder of the Religious Sisters of Charity, Written by Donal S. Blake cfc 2001, p. 37.

参考文献

- 1) Mary Aikenhead (1787-1858) Servant of the Poor. Founder of the Religious Sisters of Charity, Written by Donal S. Blake cfc 2001, Caritas 15 Gilford Road, Sandy Mount, Dublin, 4, 2007.
- 2) A short History of Dublin, by Pat Boran Mercier press 55a Spuruce Avenue Blackrock County, Dublin, 2000.
- 3) The Making of Hospice, by Mary Campion, published by Congregation of the Sisters of Charity, Mre St. London E. 8. Media House, 34 Stafford Street, Liverpool, L38LX, 2006.
- 4) The Great Irish Famine, The Irish Famine Curriculum Committee, James Mullin, 757 Paddock Path, Morestown, NJ, 1998.
- 5) St. Joseph’s Hospice: A guide to our work, 2008.
- 6) ホスピスへの遠い道 — 現代ホスピスのバックグラウンドを知るために —, 岡村昭彦, 春秋社, 1999
- 7) 愛蘭土紀行 司馬遼太郎 海道を行く 30, 中興文庫, 2007
- 8) ケルト生きている神話・フランク・ディレイニー, 鶴岡真弓・森野聡子, 創元社, 2000
- 9) アイルランドを知るための 60 章, 海老島均, 山下理恵子, 明石書店, 2006
- 10) ジャガイモの世界史, 伊藤章治, 歴史を動かした貧者のパン, 中公新書, 2008